執事は王子様

ゆず香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
執事は王子様

【Ｎコード】
Ｎ０４３３Ｊ

【作者名】
ゆず香

【あらすじ】
ある日突然異世界から現れたイケメン（ソル）！茜（あかね）は何故か「姫」扱いされ、お世話されることに。次第にハンサムで完璧なソルに心惹かれていく茜だった。しかしソルはいつかは異世界へ戻る・・・かなわぬ恋と知りながらも抑えられない思いをかかえる。

完璧な王子

・・・白馬に乗った王子様は、お姫様を魔女から救いだしました。
・・・そして二人は幸せに・・・

・・・

現実にはそんな王子様なんているわけないと、思ってた。

彼に会うまでは。

茜(あかね)はごく普通の女子高生だ。
顔も人並み、成績も平均的。
友達は多いほうかもしれない。
明るくひとなつっこい性格の茜は、クラスでは人気者だ。

ピンポーン

朝の身支度をすませた茜は、玄関のチャイムの音に弾かれるように階段を駆け下りた。

「おはよう！沙織」
「おはよー茜！」

沙織(さおり)は茜とは小学校時代からの幼馴染で、毎朝一緒に通学していた。

異世界の扉

茜(あかね)と沙織(さおり)は学校への通学路を足早に歩いていた。
「茜今日の試験科目勉強してきた？」
「あたしがするわけないじゃん！あはは！」
「えーたまにはやったほういいよ？
もう2年なんだし・・・」
「そうだね～・・でもほら！もうすぐ冬休みだよ！
休みなったらいっぱいカラオケ行こうねー」
茜は勉強が苦手だったが、沙織は学年上位の成績だった。

「さむーい！」
「あ、そこ凍ってるよ・・・」と、茜が言いかけた時だった。

「キャーーーーーッ！」

突然、緑の閃光が雷のような音とともに走り、二人は目が眩んだ。

「な、なに・・・！？」
「おしり、痛い・・・」

衝撃音に驚いた二人は思いっきりしりもちをついていた。
徐々に見えてきた目を細めながら周囲を見渡すと、目の前に見知らぬ男の人が横たわっていた。

「だ、大丈夫ですか・・・？」

茜はおそるおそる声をかけて、体を揺すった。

男の人は黒くサラッとした髪で、長いまつげだった。
とてもキレイな顔立ちをしていたので、二人が見とれていると、男は意識を取り戻した。

「うっ・・・・ここは・・・
ハッ！フィリア姫！ご無事ですか！？」

男はサッと体を起こしひざまずくと、茜の頭から足までをじっと見て言った。

「姫！どうされたのですか！そのお召し物は・・・！」
「へ？？」

驚いて固まった表情の茜を抱き上げて、男は颯爽と歩き出した。

困惑の王子

「ちょちょちょ・・・！なにになんなの！？」
あわてて暴れる茜だったが、男は背が高く力も強かったのでビクともしなかった。
沙織は後ろから追いかけて止めようとした。
「なんなんですかあなた！誘拐ですか！？」

ふと、男は立ち止まった。
眉間にしわを寄せ、辺りを見回している。
「ここは、いったい・・・？」
「ちょっと！茜を下ろしてください！
警察呼びますよ！？」
テンパっている茜のかわりに、沙織は落ち着いて抗議の声をあげた。
男はさらに落ち着いた様子で茜を抱きかかえたまま、再び歩きだした。
「・・・アカネとは？姫、この少女は何者ですか。」
「なっ？姫！？あたしがぁ～？？」
「それにここは、一体どこなのでしょう。
見たことのない建物ばかりですが・・・とりあえず城を探します。」
早足で歩く男に後ろから「待ちなさい！」と何度叫んでみても止まる気配はなかった。

「ちょっとあんた！」正気に戻った茜は男をにらみつけた。
「下ろしなさいよ！どこへ連れてくつもり！？」
「ハッ！かしこまりました。」
男は優しく茜を下ろした。
深く息を吸い込んで、茜は話し出した。

「あんた一体誰？私は姫じゃないし、城とかなんとかわけわからないんだけど！？」
「姫・・・じゃない！？ではあなたは？」
「私は茜！この子は親友の沙織！
あんた大丈夫？さっきの雷で頭でも打ったの？」
「雷・・・そうだ、確かにさっき雷のような光が・・・
ここはシュトーリア国ではないのですか？」
「しゅと・・なに？ここは日本だけど・・・」
茜は声を落として沙織に話しかけた。
（ねぇ、この人やばいんじゃない？）
（病院に連れて行ったほう良さそうだよね。でも私たち今日期末試験だし・・・もう時間遅れちゃうよ）

誰にも見られないようにコッソリ学校に連れて行き、男には体育倉庫に隠れててもらうことにした。
「いい？あんたここでちょっとの間待っててちょうだい。
その間に自分が誰だったのかしっかり思い出してね！」

試験が終わり、二人は猛ダッシュで体育倉庫に行った。
扉をあけると男は二人をみるなり姿勢を正し、深く頭を下げた。

「おかえりなさいませ」
「へっ！？た・・ただいま？」
「茜様、沙織様、私はどうやら異世界に迷い込んでしまったようです。
ここは私のいる国ではございません。
元の世界に戻るまで、お二人のお側で仕えさせて頂けませんか？」
「いっ、異世界ぃぃ！？」
「はい。私の国に古くから伝わる話がございます。

緑の稲妻が落ちる時、異世界の扉が開くと。
おそらく私はその扉を通ってこちらの世界に来てしまったのだと思います。」
「そんなのあるんだ・・・仕えるって一体どういうこと？」
「私は元の世界ではフィリア姫という方に仕えておりました。
はじめ茜様を姫とお呼びしたのは、お二人が瓜二つだからなのです。
ですからこちらの世界にいる間、是非私めに茜様のお世話をさせて頂きたいのです。」
「お世話って言われても・・・うち両親もいるしーそんな素性のわからない人ムリじゃないかなぁ。」
「そうよね。茜んちのパパもママもお家でお仕事してるしねー」
茜の両親は、二人とも有名な絵本作家だったので、主に家で仕事をしていた。
「異世界への帰り方がわかるまでの数日でかまいませんので、なんとか・・・！」
「じゃあー聞くだけ聞いてみるね。」

麗しの王子

家に帰ると、置手紙だけが残されて人の気配は無かった。

「二人で取材旅行に行ってきまーす♪
冬休みの間は一人暮らし気分を味わってていいわよ～♪」

「また急なんだから、もう・・・」
茜の両親は急に取材旅行に出かける事がしばしあった。
「まぁー明日から冬休みだし、あんた居ても大丈夫かも」
「ありがとうございます！茜様！」
「ところで、あんたの名前は？」
「私はソル・クリストと申します。ソルとお呼び下さいませ。」
「よろしくね！ソル！」

その日からソルは茜の家で生活することになった。
ソルは部屋の掃除から食事の用意、風呂やベッドの用意まで完璧にこなした。
茜は家事が全く出来なかったので、いつも両親が旅行中は散々な事になっていた。
「おいしぃ～～♪ソルってお料理上手ー」
「ありがとうございます。」
「こうなるとソルがいてくれて良かったなー。
私一人じゃいっつもカップ麺ばっかだもん！掃除も出来ないしー」
ソルは優しくと微笑むと、食後のデザートを差し出した。
「これもおいしいぃ～～」
「茜様は本当に美味しそうに召し上がって下さいますね。」
「だーっておいしいんだもん。ついつい食べ過ぎちゃうよ。」
「食べ過ぎても結構ですよ。おやすみ前に脂肪燃焼マッサージをい

たしましょう。」
「えぇぇぇーっ！そんな事もできるの？ってかマッサージはちょっと恥ずかしいよ／／／」
茜は少し頬を赤くして膝をかかえ丸くなった。
「ふふっ」
「あーっ！笑うなーっ！」
「茜様、意外と可愛らしいですね」
「ちょと！意外とってなによー！もぅ！」
茜はクラスでは明るくて人気者だったが、彼氏はいなかった。
意外にも奥手で恥ずかしがりやなので、誰とも付き合った事がなかった。

「私は隣の部屋をお借りします。何かありましたらお声をかけて下さい。
　では、おやすみなさいませ。」
「おやすみなさい・・・」
茜は眠いのに何故だか眠れなかった。
隣では今日初めて会ったばかりの男が寝ているのに、安心しきっている自分が不思議だった。
異世界だとか姫だとか、両親の描く絵本の世界のようなどこか現実離れした話・・・
「元の世界に戻るまで」・・・どうやって戻るんだろう
「冬休みの間は一人暮らし気分を・・」・・・少なくとも1ヶ月は戻らないのね
その間にソルは元の世界に戻れるのかなぁ～・・・
・・・
茜は深い眠りに落ちていった。

憧れの王子

「でっ、どうだったの？大丈夫だった？」
朝からケイタイが鳴った。沙織が心配してかけてきたのだ。
「うん、大丈夫！なんかね、料理とかめっちゃウマイの！
家事も全部やってくれるし、お嬢様になった気分だよ～」
「へぇ～！それいいね～！
顔もかなりかっこいいし、そんなに色々やってくれたら茜、惚れちゃうんじゃないの～？」
「えぇっ？ないない！」
茜はソルに聞こえないように声を落とした。
「だって異世界とか言っちゃってる人だよ？
あれがほんとの話だったらいつかは帰っちゃうし、嘘だとしたら危ない人じゃん！」
「うんー確かにそのへんは怪しいけどね・・・」
「嘘をついてるようには見えなかったけど、急に異世界とか言われても・・ねぇ。」

その時、部屋の扉を叩く音がした。
コンコン！
「あ、ソル来たみたい。また報告するね！またね！」

「はーい！今開ける」
扉を開けると、ソルが申し訳なさそうに立っていた。
「茜様・・・」
「どうしたの？」
「実は、着るものがないのです。」
「あ、そっか！今着てるのも洗濯しないといけないもんね。
じゃあ今日は一緒に買い物に行こうか！お金は置いてってくれた

のがあるし。」

外に出ると、息が真っ白だった。
町を歩くと、店頭にはクリスマスのイルミネーションが並んでいる。
「もうすぐクリスマスだね～」
「クリスマス、ですか？」
ソルは茜の斜め後ろを歩きながら聞いた。
「えっ！クリスマス、ソルの世界では無いのかぁ！
　みんなツリーやリースを飾って、ご馳走を食べてお祝いするの。
　それからプレゼント交換もね！とっても楽しいんだよ～」
「それは楽しそうですね。」
たくさんのイルミネーションを目を輝かせながら見ていると、ふと、宝石店の前で茜が立ち止まった。
「可愛い～ネックレス！」
シルバーで卵型に羽が生えているデザインだ。
「あっ、ごめんごめん！ソルのお洋服だったね」

紳士服のお店に入り、ソルに似合いそうな洋服を探していると、奥の女性店員達がなにやらキャーキャー言いながらこっちを見ている。
「あのっ！お客様！こちらのお洋服などいかがでしょうか？」
店員の一人が茜の前にずいっと入り込み、ソルに洋服を合わせている。
茜はちょっとムッとした気持ちになったが、洋服は似合っていたのでそっけなく、「いいんじゃない」とだけ言った。
女性店員は聞こえなかったのか、聞こえないふりなのか、ソルにどんどん新しい洋服を合わせている。
「お客様、背が高くていらっしゃるからモデルさんとかですか？
　とってもハンサムでどんなお洋服でもお似合いです！」
茜はすっかり気分が悪くなって店の外の空気を吸いに出た。

何が自分の気持ちをそんなに気分を害しているのかよくわからなかったが、たぶん店員の態度が悪いからだろうと思った。
ソルはどんどん話し続ける店員に圧倒され、困った様子で茜を探した。
が、その時には茜は店の中にはいなかった。
「茜様！こちらにいらっしゃったのですか！申し訳ありませんでした・・・。」
「いい服見つかった？」
「いえ、私はこちらの世界の服はよくわからないので、茜様が選んで下さいませんか？」
「私でいいの？」
「はい！お願いします」
「わかった！じゃあ一緒に選ぼう♪」
さっきまでの嫌な気分はもう吹き飛んで、ウキウキとソルの洋服を選んでいた。
ソルのキレイな顔には黒い服がよく似合う。
そう思った茜はソルの顔を見ながらよく似合う服をどんどん持ってきた。
さっきの女性店員が近づいてきた時には、
「私は茜様に選んでいただきますので、結構です。」
と、ソルが断ったことで、茜はさらにテンションが上がった。

模索の王子

「たくさん買っちゃったね～」
「ありがとうございました。」
ソルは大量の紙袋を手にかけながら深く頭を下げた。
「こんな怪しい男のために、ここまでして下さって、本当に感謝しております。」
「怪しいって・・確かに怪しいけど・・・だって異世界って嘘じゃあないんでしょ？」
「もちろんです。この世界は私のいた世界とは確かに違います。
扉がまた開けば戻れるはずなのですが、その扉が一体どうやって、いつ開くのか
それが全くわからない状態なのです・・・。」
ソルはガックリと肩を落としながら言った。
「いいよ！気にしないで家にいて！その扉が見つかるまでいればいいよ。」
茜はポジティブな性分をいかんなく発揮していた。
どう考えても怪しいこの男を頭から信じているわけではなかったが、嘘にしろ、本当にしろ、かわいそうだという思いがしていた。

「お夕飯は何に致しましょうか」
安心した様子のソルは、ニッコリと微笑みながら茜に聞いた。
「んーオムライスが食べたいな～！」
「かしこまりました。」

白い雪のかかる山のむこうに、オレンジの夕日がしずんでいった。

次の朝、ソルは家事を超スピードでこなし、身支度をすませた。

「茜様、今日は私少々出かけてまいりますが、よろしいでしょうか。」
「うん、どうしたの？」
「こちらの世界にも、扉に関する情報があるはずですので探してまいります。」
「そっかぁ！何か手伝おうか？」
「ありがとうございます。しかしこれは私の問題ですので、そこまで茜様にご迷惑をおかけするわけにはまいりません。」
「そぉ・・・？じゃあ迷子にならないように気をつけてね！」
「はい。ではいってまいります。」

出会ってまだ3日目の朝だった。
茜は心の奥にすっぽりと穴が開いたような感覚になり、寂しさを感じていた。

見知らぬ土地だし、迷子にならないかな・・・

閃き

茜はリビングのソファーに横になりながら、テレビを見るでもなくながめていた。
外はどんよりと曇っている。
ソルが出かけてから1時間ほどしか経っていなかったが、
帰ってくるのが待ち遠しく、無事に帰ってくるか心配になってきていた。

時計をチラッと見て、茜は家を出た。

こんなにソルが心配なのは、かわいそうな事情があるから。
一人じゃ心細いだろうから、やっぱり手伝ってあげたい。

早足で歩きながら、茜はソルの姿を必死で探した。
どこにいるのか見当もつかなかったが、そう遠くには行かないはずだと思い近所を探して歩いた。

ふと茜が足を止めると、そこには広い空き地があり、ヒザの高さほどの草が生い茂っていた。
「こーいうトコロとか、なんかいかにも扉がありそうじゃない？」
茜は独り言をつぶやきながら、草の中をかけ分けながら進んだ。
「私が先に扉見つけてあげたら、きっとソル喜ぶぞ～っ」
言いながら、茜はずしりと心に重たいものが落ちてくる感じがした。
扉が見つかったらソルはすぐに帰るだろう・・・
そう思うと何故だか無性に胸がしめつけられた。

茜は今まで恋には疎かった。
それでもこれが恋だと気づくのは容易な事だった。

「私、ソルに・・・側に居て欲しいんだ・・・」

でもソルは異世界の住人だ。
いつかは別れがくるのだと頭ではわかっていたが、
茜の思いは滑り台のように急降下し、止めることなど出来ないほど
走り出していた。

自分の思いをなぞるように考えていると、
足元がグラリと揺れ、茜はバランスを崩してどこかへ転がり落ちて
いった。

誓い

外は日が傾き始め、雪もちらついていた。
ソルが家に帰ってもう3時間ほど経っていた。
帰ってきて茜が居なかったので、どこかへ出かけたのだろうと深くは考えなかった。
夕飯の下準備も済ませてひと段落したソルは、外を眺めた。
「茜様はまだだろうか・・・」
ソルは茜の世話をするとは言ってもただの居候にすぎない。
住まいを借りる代わりに、家事全般をまかせてもらうのだと解釈していた。
ソルにとって茜は守るべき主、フィリア姫ではない。
扉さえ見つかればすぐに戻るのだから、あまり深く干渉すべきではないと考えた。

とはいえ、外はどんどん暗くなり、雪も窓を横殴りに叩きつけ始めていた。

心配になってきたソルは、外に探しに行くことにした。

「茜様！」と声を上げて探し歩いていると、草の生い茂った開けた場所に出た。
薄暗い中を草を掻き分けて歩いていくと、足が段差に気づいて立ち止まった。
どうやら2メートルほどの崖にようになっているようだった。
落ちないように下をのぞくと、
そこには茜が横たわっていた。

「茜様！！！」

ソルはヒラリと飛び降り、茜の横にひざを付いた。
茜は呼びかけても返事がなく、意識を失っていた。
「脈はあるが、体が冷え切って・・・！なんて熱だ！！！」
ソルは茜を抱きかかえ、崖部分を迂回して上に上った。
そして走って家に戻ると服を着替えさせ、布団を大量にかぶせて、頭には袋に入れた氷を乗せた。

「茜様！しっかり・・・！」

返事は無かった。浅く早い呼吸を繰り返すばかりだ。
「私がもっと早く探しに行っていれば・・・！！」
ソルは深く後悔した。
お世話になっていながら、茜の存在を軽く扱った。
そのせいで茜がこんなにも苦しんでいると思うと、自分に対する怒りすら湧いてきた。
この世界の住人ではないソルにとって、苦しんでいる茜を救う手立ては
自分で看病する以外には思いつかなかった。
汗を拭き、氷を取替え、ずっと側で見守った。

徐々に外が白みかかってきた頃、茜は目を覚ました。
「・・・あ、れ・・・ソル・・・？」
「茜様！！！目を覚まされましたか！？
お加減はいかがですか！どこか痛い所などございませんか！？」
「えっ、あ、なんか体があちこち、痛いような・・・」
「何箇所か打撲になっておりましたので、湿布など貼って処置をしておきました。

熱もかなり高く、一晩中意識も無かったのですよ。」
「へっ！一晩・・・じゃあここにずっといてくれたの？」
「もちろんでございます。
私のせいでこんなことになってしまい、本当に申し訳もございません・・・！」
「そんな、ソルのせいだなんて！
私がドジだから崖から落ちちゃっただけで・・・
そんな、ちょっと！頭下げなくていいよ！ね、イスに戻って。」
床に手をつき土下座していたソルに、茜は柔らかく言った。
ソルはイスに座ると茜をじっと見つめていた。

こんな私に茜様は優しい言葉をかけてくださる。それに比べて私は・・・
この先どんなことがあろうと、茜様を危険な目には合わせない。
私は姫をお守りするのと同様に、茜様をお守りしよう・・・。

期待

茜は夢を見ていた。

体は動かない。
うっすらと目を開けると、薄暗くどんよりとした空が広がっている。
一人きりの静寂の中で、次から次へと自分の上に冷やりとしたものが落ちてくる。
耐えがたい眠気の中で、茜は夢へと落ちていった。

夢の中で、子供の頃の茜は両親の描いた絵本を読んでいた。
悪い魔女につかまってしまったお姫様が、毒で眠らされている。
そこへ現れたのは王子様だ。
魔女が魔法で作った怪物をどんどん倒してお姫様の元にたどりつく。
剣を取り出し、魔女を一突きすると魔女は消えて居なくなった。
王子様はお姫さまを抱き上げて・・・

ふと気づくと茜は絵本の中のお姫様になっていた。
隣には自分を抱きかかえる王子様。
黒い髪に切れ長の瞳。すっとキレイに通る鼻筋。
なんてハンサムな王子様・・・でも、どこかで見たような・・・・？

茜はゆっくりと目を開けた。
ぐるんぐるん回る景色を目をこらして見回す。
すると横ではソルが心配そうに茜を見つめていた。

「・・・あ、れ・・・ソル・・・？」
「茜様！！！目を覚まされましたか！？

お加減はいかがですか！どこか痛い所などございませんか！？」
ソルは目を大きく見開いて、茜の頬にそっと触れた。
「えっ、あ、なんか体があちこち、痛いような・・・」
体のあちこちがズキズキと痛み、頭は相変わらずぐるんぐるんと回っている。
「何箇所か打撲になっておりましたので、湿布など貼って処置をしておきました。
熱もかなり高く、一晩中意識も無かったのですよ。」
「へっ！一晩・・・じゃあここにずっといてくれたの？」
「もちろんでございます。」
その言葉に茜は体中の熱がぐっと上がるのを感じた。
ソル、あたしのこと心配してくれてたんだ！
急に恥ずかしくなり、ソルの顔を見れなくなった茜は目を逸らした。
「私のせいでこんなことになってしまい、本当に申し訳もございません・・・！」
「そんな、ソルのせいだなんて！
あたしがドジだから崖から落ちちゃっただけで・・・」
ふと横に目をやるとソルの姿はなく、なんと床で土下座の姿勢をとっていた。
「そんな、ちょっと！頭下げなくていいよ！ね、イスに戻って。」
イスに戻ったソルは、妙にマジメな顔つきで茜を見つめていた。
黒くてサラサラの髪の毛、切れ長でりりしい瞳、すっと高い鼻・・・
茜は夢の中の王子様を思い出した。
あれはソルだったんだ・・・夢じゃなくて、本当に私を助けてくれ

たんだ・・・。

はっ、と茜はソルと見つめ合っていた事に気いた。
顔に火がついたかのように一気に恥ずかしくなり、目を逸らした。

なんでこんなに見られてるの！？
あたしの事、そんなに心配してくれてるってことかなぁ・・・
それとも・・・？ちょっとは期待しちゃってもいいのかなぁ・・・

長い沈黙のまま、徐々に部屋に朝日が差し込み始めていた。

茜の葛藤

2日たち、茜は熱が下がって元気を取り戻した。

「さおリー！久しぶりーっ！上がって上がって！」

「久しぶりだね～茜！おじゃましまーっす！」

沙織は久しぶりに会う茜の雰囲気が変わっていることに早くも気づいた。

茜の部屋に入り、ソルの用意してくれたクッキーをつまみながら、沙織はさっそく切り出した。

「それで、ソルさんとはどうなの？何か進展したの？」

ニヤリ、と沙織は茜をからかうような目つきで見た。

「え、えぇっ！？？な、なんで、あたしまだ何も言ってないのに！」

「もぉ、好きなんでしょ？恋してるオーラ滲み出ちゃってるもん。

茜ってば顔に出やすいんだから～」

あははっ、と軽快に笑う沙織の肩をペシッと軽く叩いた。

「だってーほんとカッコイイよね～ソルさん。

しかも尽くしてくれるんでしょ？そりゃー惚れないわけないもんね」

「うっ、尽くすとか、そんなんじゃないけど・・・」茜の頬は真っ赤で熱くなっていた。

「でもどうするの？ソルさんっていつかは帰っちゃうんでしょ？」

「ん・・・そうだね・・・」

まさに茜はそのことで2日間ベッドの中で悶々としていた。

恋だと自覚したはいいが、相手は期間限定の異世界の人。

アタックしようにも結果は目に見えていた。

それでもソルを見るたびに小さく跳ね上がる茜の心は、ソルを好きだと素直に訴えていた。

「茜はさ、奥手で彼氏とかも今までいなかったじゃない？
告白されても逃げてばっかで、相手の気持ちに答えた事なかったでしょ？」
学校の男子に今まで何度か告白されかけたことがあったが、
そのたびに恥ずかしさから逃げてばかりいた。きちんと話すら聞かなかった。
「もしソルさんのこと好きなら、ちゃんと伝えてみたら？
今まで茜を好きって言ってきた男子達の気持ちも、それでわかるよ、きっと。」

ソルに告白？そんなの考えられない！
だって、一緒に住んでるんだよ？
毎日一緒にいられるのに、これ以上なにも望まなくてもいいんじゃない？
むしろ告白して断られたらすっごい気まずい事になるし・・・。
茜の理性とは裏腹に、茜の心はソルと両思いになったら、という甘い想像に駆られていった。

告白だなんて・・・

夕飯の時間、茜とソルは向かい合って座って食べていた。
初めのうちは茜の後ろに立ち、執事のように茜の食事を見守っていたのだが、
「恥ずかしいから一緒に食べようよ」
という茜の提案（命令？）で一緒に食べるようになっていた。

「茜様、お加減がよろしくないのですか？」
ソルが心配そうに茜の顔を覗き込んだ。
「え、ううん！ぜんぜん元気だよ！」
沙織が告白をけし掛けたおかげで、茜はソルの顔をまともに見れなかった。
熱は下がったはずなのに、ずっと頭がぼーっとして熱っぽかった。
「今日のお食事、あまりお好みではなかったですか？」
「とんでもない！相変わらず美味しいよ！うん！」
茜は和食が好きだったので、ソルは和食をよく出してくれた。
ほくほくと煮込んだじゃがいもとにんじんを口に入れ、よーく味わって食べた。
「んん～絶品～」
ほっぺが落ちそうな料理に茜はとろけそうな声を上げた。
茜がふと気づくとソルが茜を見つめていた。
「な、なに？」
「いえ、茜様は本当に美味しそうに召し上がって下さるので、作った甲斐があります。」
ソルはいつもの優しい口調でニッコリと微笑みながら言った。

食事を済ませ、お湯につかりながら茜はまた物思いにふけった。
徐々に強くなる茜の心の思いに、理性は根負けしそうになっていた。
異世界に帰ってしまう、という事実よりも、両思いになれたらという甘い誘惑が勝っていた。
もし両思いになったら、デートとかしたりしちゃうんだよね～
しかも好きな相手と毎日一緒にいられるなんて、こんな幸せないよ

ね。
デートから帰っても一緒にいられるんだ。
一緒にご飯食べて、夜も一緒に布団に・・・
茜は頭にかーーーっ！と血が上った気がして、大きく頭を振った。
あたしってばエッチな妄想しちゃうとこだった！？恥ずかしい～～！
・・・ソルってどんな女の子が好みなのかな～
でも聞いたら変に思われるよね・・・うーん、はぁ・・・告白かぁ・
・・

夜、布団に入ってからもソルのことで頭はいっぱいだった。
このまま夢にまで出てきてくれても、いいなぁ・・・

聖夜

ソルと出会ってから6日が経っていた。
その日は聖なるクリスマス。
ソルに対する自分の思いを自覚した茜は、思いを伝えるほどの勇気はないものの、何かプレゼントしたいと考えていた。

クリスマスプレゼントといえば手編みのマフラー？
でもそんなに器用じゃないし、一日で編みあがるわけない・・・
手作りケーキとか？
でもソルのほうがよっぽど料理上手だしな～
あ、でもでもソルは初めてのクリスマスだし、クリスマスケーキって知らないかもしれないよね。
じゃあいいかもしれないな！うん！そうしよう♪

そのためにはまずソルにちょっと家から出ててもらわないと！

「ソルー！ちょっとお願いがあるんだけど・・・」
「はい、なんでしょうか？」
「今日ちょっと沙織が遊びにくるんだけど、ソルがいると恥ずかしいんだって。」
・・・ごめん！嘘の言い訳に沙織使っちゃって！
「だから夕方まで、外に出ててもらってもいいかなぁ？」
ソルは一瞬何か考え込むような表情をしたが、すぐに「かしこまりました。」と笑顔で返した。

ソルを見送り、茜はケーキ作りの材料を探しにキッチンに向かった。
キッチンには幸い材料は揃っていたので、早速作り始めた。

茜は料理は苦手だがおやつ作りは得意だった。
なぜなら自分が食べたいがために、子供の頃からしょっちゅう作っていたのだ。
粉をふるい、卵白をあわ立ててメレンゲを作り・・・
昼過ぎには美味しそうなチョコレートケーキが出来上がった。
飾りのサンタさんを乗せて、と。ん～完璧！
そういえば、クリスマスツリー飾ってなかった！
ソルが帰るまでまだ時間があったので、飾り付けることにした。
茜の背丈ほどもあるツリーに、サンタの人形や鈴、プレゼントの形の模型、キャンドルなどをぶら下げていく。
ライトも巻きつけ、あとはスイッチを入れるだけ。

はっ！と茜は気づいた。
あたし、もちょっとクリスマスにふさわしいお洋服に着替えなくっちゃ！
階段を駆け上がり、洋服ダンスを思い切りよく開ける。
えぇーーっと、これじゃない・・・もっとこう可愛いのないかな・・・
茜が迷いに迷って手に取ったのは、薄いピンクの膝丈ほどのワンピースだった。
ノースリーブで、白い小さな花柄の刺繍が散らされている。
ピンクのワンピースの上に白いカーディガンを羽織った。
普段化粧などはしない茜だったが、今日は気合を入れてファンデーションを手に取った。
口にはうっすらとピンクのリップを塗った。
ソル、少しは可愛いと思ってくれるといいな・・・。
鏡に全身を移しながら、最終チェックをしていると、玄関からソルの声がした。

「ただいま戻りました。」

ソルは玄関でコートを脱いでいるのか、ガサゴソと物音がする。
茜はその隙に急いで階段を駆け下り、居間に入った。
そして部屋の電気を消してツリーのスイッチを入れ、ソルを迎えた。

扉が開いた。
ガチャッ

「メリークリスマス！ソル！」

ツリーのキラキラと光るライトを背に、茜はソルに向かって笑顔で言った。
ソルは目を見開き、驚いたように茜を見つめている。
ビックリしてる～まずは大成功！と、茜はより一層笑顔になった。
キッチンに走った茜は、ケーキを持ってきた。
「これ、クリスマスプレゼント！頑張って作ったんだよ。
良かったら食べてくれる？」
お皿の上にチョコレート色のキレイに飾り付けられたケーキが乗せられ、甘い香りを漂わせている。
ソルは相変わらず大きく目を見開いたまま固まっているようだった。
「・・ソル？もしかして、迷惑だった・・・？」
茜は何も言わないソルにちょっと不安になって聞いた。
「茜様・・・！迷惑だなんてとんでもございません！」
ソルは茜の手をとり、跪(ひざまず)いた。
「私のためにこんな用意をしてくださって、本当に嬉しいです。
感激のあまり、言葉も出なかったのです。」
そして、跪いたまま手に取った茜の小さな手に、そっとキスをした。
「ソル・・・！」

茜の心臓はまさに口から飛び出そうなほどに高鳴っていた。
茜の手をとったまま、ソルは立ち上がった。
そして手を離すと、茜の後ろに回った。
「茜様・・・」
ソルが名前を呼ぶと、耳元に息がかかり背筋がゾクッとした。
「これは私からのプレゼントです。」
そういうと茜の胸元にヒンヤリとしたものが触った。
「これ、ネックレス？」
「はい、私の使っていたものでしたが、茜様に似合うようにアレンジしてみました。」
細いシルバーのチェーンに金色の丸い枠、その中にはピンクゴールドのハートが光っている。
「可愛い・・・！」
茜は自分の首にかけられたプレゼントを手に乗せ、声を震わせた。
再び茜の前に立ったソルは、茜の顔から首元に目をむけた。
「よくお似合いです。とても綺麗ですよ。」
そして頭がクラクラしそうなほどの、最高の笑顔を茜に送った。
茜はノックアウト寸前の頭を、しっかりしろ！と叩き起こし、息を大きく吸った。
そしてソルに感謝の気持ちを伝えようと口を開いた。
「ソル、ありがとう。大好きです。」
・・・・・・・・・・・・・！！！
一瞬誰がそんな言葉を発したのかと疑ってしまった。
が、それは紛れもなく茜自身の口から出た言葉だった。

あわてて口に手を当てて隠してみるものの、時すでに遅し。
ソルはまたしても目を大きく見開き固まっている。
しかし今度はさっきとは違って少し困った表情をしているように見えた。

「茜様・・・私は・・・」

悲しそうな声だった。
その声を聞いて茜は心にザクッと冷たい痛みが走るのを感じた。
そしてそのあとに続く言葉が容易に想像できてしまった。

「ご、ごめんなさい！！気にしないで、今のは、今のはその・・・じょ、冗談だから・・・」
嘘にしてはバレバレすぎる、と思ったが、それ以外に言葉として出てくる物は無かった。
ここから走り去りたい！と強く思ったが、足が根でも生えたかのように動かなかった。
茜は弁解することも動くこともできず、ただ立ち尽くした。

下を向いたまま動かない茜に向かってソルは静かに口を開いた。
「茜様。私は明日、元の世界に戻ります。」
茜は目線を下からソルの顔へと移した。
ソルはじっと、茜を見つめている。
その表情からは何を思うのか読み取ることは出来なかったが、先ほどの言葉が冗談なんかではないということだけは、確かだった。

次の瞬間、茜は部屋への階段を駆け上がっていた。

別れ

茜は布団にもぐり、小さく丸まったまま、まだ激しく叩き続ける鼓動を抑えるかのように心臓の上に手を当てた。

いま、あたしソルに何をしちゃったんだろう・・・

可愛いネックレスもらって嬉しくて、ありがとう、って言いたかっただけなのに。

なんであんなこと・・・

茜の言葉を聞いたあとのソルの悲しげな顔が脳裏をよぎり、

また心臓に冷たいナイフを突き立てられたかのように痛んだ。

「明日帰ります」

その言葉が何度も頭の中でリピートし、茜の心はどんどん深い沼にでも沈んでいくかのようだった。

「明日帰ります」

いつか帰る事はわかっていたはずだったのに・・・

明日・・・

茜の目からはただただ、熱い涙だけが溢れ続けた。

次の朝、茜は精一杯の勇気を振り絞って階段を降りた。

「おはよう！ソル」

「・・・おはようございます、茜様」

「昨日はごめんね、変な冗談言っちゃって！今日帰るんだよね。いつの間に扉見つけてたの？てゆーか場所はどこ？何時くらいに行くの？」

途中ソルが口を開きかけたが、話す隙も与えずに一気に話しきった。

「え、えぇ・・・実は扉は昨日見つかったのです。

扉、というよりは昨日見つけたのは、時空の番人という者です。

その番人によると、異世界から来たものにとっては、

異世界に留まるというのは大変に体に負担がかかるのだそうです。

そのリミットが7日間。それまでに元の世界に戻らなくてはいけないと言われました。

時空の番人は扉を開く力を持っており、扉は今日の正午開く事が可能だと言われました。

急な話になってしまい、申し訳ございません・・・。」

「そう、なの・・・今日の正午ね。わかった。」

ソルの顔を見るとまだ心臓にあの冷たい痛みが走るので、茜は下を向いたままだった。

「見送りにはちゃんと行くよ。無事に帰れるといいね！」

「茜様！」ソルは呼ぶと同時に茜の手を取った。

茜は何が起こったのかわからずに、ただそのつかまれた手を見つめた。

「お願いがございます。
時間までの間、私と居て下さい。」
つかまれた手からソルの顔へと目線をあげると、ソルは真剣な眼差しで茜を見つめていた。
茜は顔が熱くなるのを感じた。
「い、いいけど・・・？」
「では、一緒に外へまいりましょう。」

外に出ると吐く息は白くなっているものの、暖かな日が差していた。
「茜様、寒くありませんか？」
「うん、大丈夫」
何故外に連れ出されたのか意味がわからないまま、茜は歩き出したソルの後を付いていった。
「茜様、風邪などひかれては大変です。おつかまり下さい。」
そういってソルは腕を差し出し、茜に腕を組ませるように促した。
茜はおそるおそるソルの腕に手を添えた。

なんであたしソルの腕につかまってるの？
なんでソルと外歩いてるの？
もうすぐお別れなのに、意味わかんない・・・

意味不明なソルの行動に頭の中はハテナマークだらけだった。
それでもソルの腕に触れている自分の手のあたりが、なんだかほんわか暖かく、なごんでいくのを感じていた。

それからどれくらい経っただろうか。
世間話をしながら歩いたり、公園のベンチで休憩しながら時間をすごした。

会話なんてほとんど成立していなかったように思われた。
ソルが「友達とはどんな事をして遊ぶのですか？」と聞くと
茜は一言、「カラオケとかかな・・・」とだけなんとなく答える程度だった。
なるべく考えないようにと心を無にしてみても、別れの時間は刻々と近づいていた。

「茜様、ここが扉の開く場所です。」

そこは茜が落ちて怪我をした崖のある草っぱらだった。

「・・・・・そっか。もう時間なんだね。」
最後くらい笑顔で見送りたかった。
ソルとは1週間しか居られなかったが、こっちの世界もなかなかいいものだったと思われるように、精一杯の勇気を振り絞って、笑顔を作った。
「ソル、元気でね！」

顔を上げると、ソルはまたしても悲しそうな顔で茜を見つめている。
茜は夕べのソルの顔を思い出し、またしても心臓にグッと痛みを感じた。
そしてソルの腕にかけた手に自然と力が入るのを感じた。

この手を離したら、ソルは消えてしまうかもしれない・・・

そう思うとどうしても手が離せなかった。

あたし今、きっと変な顔してる・・・
泣きそうなのに笑顔なんて作れないよ・・・！

「茜様・・・」

うつむく茜の手を、ソルはつかんだ。
そしてそのまま力を込めて引き寄せて、茜はソルの腕の中に包まれた。
ソルの胸にピッタリとくっついた茜はもうなにが起きたのか理解できず、ただ固まっていた。
徐々に大きく聞こえるソルの心臓の音を聞きながら、両頬に暖かいソルの手の温もりを感じた。
その直後だった。

呆然と固まる茜の唇に、ソルはそっと、自分の唇を重ね合わせた。

暖かい・・・。頬も、唇も・・・・・。
思いがけないソルの行動に、茜の目からは熱い涙が流れていた。

その涙をソルは、頬に添えた手で優しくぬぐい取った。
「ソル、どうして・・・」
茜は口を開いて話し出そうとしたが、その先は再び重ねられたソルの唇によって塞がれた。
さっきの優しさとは違って、今度は強く、強く・・・。

辺りを緑色の光が照らし始めていた。
扉が開きだしたのだ。
二人は光に気づき、光の出所に目を向けた。
視線の先には、細長い円状の裂け目がある。そこから光が溢れていた。

「茜様！」

呆然としていた茜は、裂け目の前へと移動したソルの姿を視界に捕らえた。

「私は戻ってまいります！
必ず、あなたの側に戻ってまいります！」

ソルは向きを変え、裂け目の光の中へ入っていった。
緑の光の中に溶けるように、ソルの姿は見えなくなっていった。
そして裂け目も薄くなり、消えていった。

「ソル・・・戻ってくる・・・の？」

その一部始終を、草っぱらの外の塀の影から見つめる人影があった。
光と裂け目が消えると、その影も静かに姿を隠した。

決意

緑の眩い光の中で、ソルは意識が遠のいていくのを感じた。
足元が空を切り、よろめいて前のめりに倒れこんだ。

茜様・・・
いつから私はこんなにも貴方に心を奪われていたのか。
あの怪我をした日、必ず守ると心に決めた日だろうか？
それとも、姫と同じ容姿ながらも無邪気なあの笑顔を見た時・・・
出会ってその日の晩か？
夕飯を食べて「美味しい」と笑ったその顔に、目は釘づけだった。
その時に私の心は傾いていたのかもしれない。

ソルは元の世界に戻り、姫のお側へ戻るつもりでいた。
それなのに夕べの茜を見ていて、自分の本心は茜の下に残りたい、
と訴えている事に気づいた。

夕べの茜様・・・色とりどりのライトを背に、薄いピンクのワンピースが眩しかった。
あの無邪気な笑顔で微笑まれて、不覚にも抱きしめそうになってしまった。
抱きしめる代わりに、その小さな手にキスをした。
茜の後ろに周り細い首筋にネックレスをかける時など、自分の手が暴走し茜に触れたいとわがままを言い出しているのを、理性でなんとか耐えた。
ネックレスをかけると、茜の普段の可愛らしさからは想像もつかないほど美しい女性へと変わっていた。
その時、茜の口からは思いもよらない言葉が・・・

「好きです」

最初は何の冗談かと思った。
深い意味などない「好き」なのかもしれない、と。
しかしその思いは目の前の茜の態度によって早々に打ち砕かれた。
みるみる頬を朱に染め上げていく茜。
茜の本気の態度を見ながら、ソルの頭には明日帰るという事実が重くのしかかっていた。

可愛い茜様・・・私は貴方の側に居たくとも居られない。
元の世界で私はやらなければならない事がある。
それを片付けないことには私は貴方の側には居られない。
しかし無事に茜様の下に戻れるという保障は無い。
私のこの思いを打ち明けても、もしもこのまま戻れなかったら、茜様に悲しい思いをさせることになってしまう。
何も告げずに、向こうに帰るべきなのかもしれない・・・。

明日帰る事実を伝えると、すぐに、茜は顔を上げることもなく走り出して行ってしまった。

茜様・・・！
私は、貴方をまたしても傷つけてしまった。
必ず守ると堅く誓ったのに。

ソルはリビングの様々な光に照らされたケーキに目をやった。
テーブルの上のチョコレートケーキには、メリークルスマス、と書かれたチョコが乗っている。
ふと、茜が「メリークリスマス」と言った時のあの眩しい笑顔を思い出し、胸が痛んだ。

あの無邪気な笑顔を傷つけてしまった・・・。

フォークを取り出し、ソルはケーキを食べ始めた。
一口食べるごとに、茜の事を思った。
無邪気な笑顔、熱で意識が無かったあの夜の事、さっきの美しい姿・・・。
そして傷つき走り去った後ろ姿・・・。

次の朝、茜の顔を見ると目が赤くなっていた。
それでもムリに明るく振舞う姿に胸が締め上げられるようにい痛んだ。

出発の時間までの間に、ソルは茜の手のぬくもりを感じながら思いを巡らせていた。
また戻れる保障はない。
もしかしたらもう会えないかもしれなくとも、それでも私は貴方に今朝のような、あんな顔をさせたくない。

別れの時、茜は小さくなりうつむいたまま動かなかった。
小さな手には心なしか先ほどより力がはいっている。

ソルはほんの数日前に自分がした決意を思い出した。
必ず、私が守る！
そうだ、私は茜様の下に必ず戻ってみせる！

心に強い決意を抱き、うつむく茜を自分の胸の中へ抱きしめた。
そしてうつむいたまま固まる茜の頬に手を添え、薄い桃色の唇に自分の唇を重ねた。

茜は驚いた様子で何か話そうと唇を離し、口を開きかけた。
しかしソルはそれを自分の唇でふさぎ、自分の決意の強さを伝える
かのように、強く重ね合わせた。

ソルがふと目を開けるとそこは自分の元居た世界だった。
自分のなすべき事をしっかりと胸に留め、ソルは足をは足を進めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0433j/

執事は王子様

2010年10月10日05時22分発行